

望遠鏡と赤い本

小山 ひさ子

表紙も角もすり切れて、幾つかに分解してしまった1冊の赤い本がある。

模型製作ニューハンドブック第6篇

「天体望遠鏡の作り方と観測法」

反射鏡磨きの大家、木辺成麿氏が24才のときに書かれたものだという。頁をくると、その中からさまざまな昔の思い出がよみがえってくる。

ツゴイネルワイゼンのバックミュージックに星々の輝きが消えていって、プラネタリウムが夜が明ける。もうすっかり星のとりこになっていた。今から30年ほどの昔、東京は有楽町、東日プラネタリウムでのことである。家に帰って見上げた自然の夜空は、プラネタリウムもおよばぬ程すばらしかった。

年に一度、七夕の夜だけしか見えないと信じていた天の川は、夜毎、頭上を横切って、果ては白雲とまがうばかりにくっきりとした姿で南の地平線に流れ込んでいたのである。何か未知の世界から、しきりに呼びかけられているようで、じっとしていられなかった。

やっと手に入れた村上先生の全天星図をたよりに、プラネタリウムで覚えた真赤なアンタレスを起点とし、星座観察へと天文の第一歩をふみ出した。

正直にいうと当時、星座神話にはあまり興味が湧かなかった。お星様を科学的に覗いてみたい欲望にかきたてられて町で一組50銭也の美しい青レンズを手に入れ、ボール紙で説明通りに組立てて外を覗いてみた。遠くの人が逆立ちして歩いているのが如何にも天体望遠鏡らしく実に愉快であった。その夜の訪れの待ち遠しかったことは初めて望遠鏡を手にしたもののみが体験する絶対的なものであろう。早速一番星に筒口を向けてみた。ポーツとした丸い物が、チラリ、チラリと視野の中を走り抜ける。何だか物足らぬ変な感じだった。アイピースを抜き差しすると星の大きさが変わる。“さては倍率の変化かな？”と延したり縮めたりして喜んだ。

——哀れなるかな、これすなわち焦点内外像とは知る術もなく——

天文知識は少しづつふえていった。老眼鏡を使って天体望遠鏡ができるという「学生の科学」の記事をよんで早速眼鏡屋へとんでいって老眼鏡を1枚わけてもらった。間口の広いその店は時計と眼鏡を扱っていて、大きな柱時計の長い振子がカッチン、カッチンゆれていた。この主人も望遠鏡が好きとみえて、おまけとして作り

方まで教えてくれたのである。前に青レンズを買っていた変な娘を覚えていたのかも知れない。ボール紙細工はだんだん上達して、カチカチの美しい筒ができた。墨をぬってロウでピカピカに磨き上げるとアイピース筒がスルスルなめらかに動く、倍率は40倍足らずだったと思うが月の噴火口はかなりよく見られた。

さて、折も折、とも座に新星現わるのニュースを耳にした。スワ獲物！とばかり早速愛機（といっても筒だけだが）と全天星図を小脇に人っ子一人通わぬ夜半の寒空に意気ようようと新星観察に出かけた。目指す新星はついに見つからなかったが、物音一つない夜半の星空が何とすばらしいものであるかをこの時知ったのである。

何としても本格的な望遠鏡がほしかった。“反射望遠を組立てよう”といっても写真以外にはお目にかかったことのない代物である。“何とかなるだろう”。鏡が手に入らぬ中に工作記事を見ながらゴリゴリ木工が進んだ。三脚と架台は新しい木を用いたが、四角筒は苔むしたはめ板を洗ったものである。製作法と写真を見くらべつつどうやら外観上はステキなものができあがった。月日がたっても待望の鏡はついに手に入らなかった。

そのころ、ふと手に入れたのがこの赤い本である。“反射鏡が作れるかも知れない”。大それた考えをおこして頁を開いた。

第1章 望遠鏡の基礎知識、第2章 選び方、第3章 屈折望遠鏡の作り方。

著者木辺氏も充分に体験されたのであろう、望遠鏡を持ちたいとあこがれる初心者の気持をよくとらえて親切な解説である。感激のあまり本をかかえてボロボロ涙をこぼした程だった。

これまではよかった。第4章からがいよいよこの書物の主目的とする凹面鏡の磨き方に入るのである。これは何とも歯がたたない。特にフーコーテストの影となるとチンプンカンプン、何のことやら全くわからなかった。結局はあきらめて再び屈折に転換した。父にねだって36ミリ60倍の完成品を手にして初めてあこがれの土星の輪にありついたのである。太陽、月、火星、木星と手当たり次第に鏡筒を向けた。星団、星雲、二重星と小さいながら一通りの満足をあたえてくれた。

赤い本も望遠鏡も戦火でやけた。防空壕の中からあめのようにとろけたレンズを掘出した時は何とも淋しく、降るような星空の下で涙がとめどなくあふれてきた。

博物館に勤めるようになってしばらくしてからのこと、二冊持っているからと村山氏から頂いたのが、もう手に入らないと思っていたこの赤い本なのである。

数年前、読売新聞の記者をしておられる山本氏が“磨いてみませんか。面白いですよ”と10cm鏡材と研磨材一式、それにわざわざ六角形の研磨台まで作って持ってこられた。イロハから手ほどきを受けて初めて反射鏡を1枚磨き上げた。あの頃読んだ様子とはずいぶん変わっていた。研磨材は水分離の必要が全く不要な程に粒子が均一化されているし、紅柄に代ってレンズのつや出しはすりきずの心配が少いセロックスが使われるようになった。同氏のアイデアで研磨台も小さな板切れ1枚。研磨台の周りを廻らなくても板切れの方を廻して作業するといった、きわめて簡単な方法である。

決して上等の出来ではなかったが、月や土星の輪をみ

たときは、自分の力で天体をとらえたような、いい知れぬ感激だった。どうにか鏡磨きの概要がつかめてみると、この赤い本の良さが改めて認識される。

同書は1936年に誠文堂新光社で発行されたもので、まだ研磨材は必ず水分離が常識であったし、鏡面も銀メッキの時代といったように大変古めかしい内容のものである。戦後、一度これの改訂版が発行されていたが、数年前、写真も内容もすべて近代的に新しく生れ変わった「新版反射望遠鏡の作り方」が出版され、反射鏡作りのアマチュアの指導に一役を買っている。

“これは面白いですよ。何とか手に入らないでしょうかね”。よく博物館にやってくる反射鏡磨きの上手な若い学生HさんとIさん、この古い赤い本の頁をめくることがおきまりである。すっかりバラバラに分解してしまうのもそう遠くはないようだ。(国立科学博物館)

日本天文学会昭和47年度春季年会記事

昭和47年度春季年会は5月22日(月)~25日(木)の4日間、東京都文京区本郷東京大学理学部2号館講堂で行われた。講演数124、出席者約300名、座長には次の方々をお願いした。

- 22日 午前 安田春雄, 奥田豊三 (講演数 14)
午後 飯島重孝, 古在由秀 (" 21)
- 23日 午前 大沢清輝, 斎藤国治 (" 15)
午後 田中春夫, 藤田良雄 (" 18)
- 24日 午前 須田和男, 大野陽朗 (" 15)
午後 坂下志郎, 清水 彊 (" 14)
- 25日 午前 会津 晃, 小暮智一 (" 14)
午後 赤羽賢司, 河鱈公昭 (" 13)

なお会期中、理事会、評議員会、懇親会、総会および天体発見賞贈呈式があり、また天文教育懇談会および学術会議報告会(古在学術会議会員による)が併催された。

総会議事録

(5月24日午後3時半~5時半、講演会場で開催)

議長: 奥田豊三理事長

- 次第: 1. 天体発見賞贈呈の件
2. 昭和46年度会務報告
3. 昭和46年度会計報告
4. 昭和47年度予算案
5. 次期評議員改選
6. 牧田理事辞任承認の件
7. 光害規制運動の件
8. 定款改訂についての経過報告

◇ 天体発見賞贈呈の件

原案通り承認され、昨1971年7月10日にケフェウス座新星1971を発見した桑野善之氏に対し、天体発見賞が贈呈された。

◇ 昭和46年度会務・会計報告および昭和47年度予算案が(附録参照)承認された。

◇ 次期評議員改選

評議員会からの推薦に基き、つぎの15名を新評議員に選任した。(任期 昭和47年~51年, *印は重任)
海野和三郎, 大沢清輝*, 大野陽朗, 大脇直明, 川口市郎*, 河鱈公昭*, 古在由秀*, 進士 晃, 須川 力, 須田和男, 高倉達雄, 檀原 毅, 成相秀一*, 林忠四郎*, 村山定男*

◇ 牧田理事辞任承認の件

牧田庶務理事の辞任申出(病気による)を承認した。

◇ 光害規制運動の件

本会会員の青木正博氏、箕輪敏行氏から、両氏らを代表者として組織された「日本星空を守る会」が、環境庁長官あてに提出した「回転サーチライトの即時禁止、一般照明の天空照射規則について」という陳情書の趣旨が説明され、日本天文学会もこの運動に参加されたいという要望がなされた。これに対して理事会側から、5月22日の理事会でこの件について討議決定した方針——本会としては、市民運動としての上記陳情と並行して、専門観測者の立場から、光害規制を訴える理事長名の要望書を作る——が説明され、総会の了承を得た。

◇ 定款改訂についての経過報告